研究ノート

邪まな祈り：新潟県佐渡島における呪詛

梅屋 潔*

Ⅰ．はじめに

新潟県佐渡島の民俗宗教において，「イノリ」[1]は日常的な行為であった。毎朝，毎月，毎年，折りに触れて，豊作，大漁，健康，長寿など幸運や幸福をイノルことは，島の人々にとって日課でもあった。ところが，そういった幸福をもたらすイノリを行うとともに，かれらは人に厄災をもたらす邪悪な意図を以て神仏に願をかけることがあったという。人々はこのような邪悪なイノリを指してイマイ（忌まい）という言葉を用いることもあるが，多くは単にイノリと呼んだ。もちろん，人類学でいえば邪術・呪詛にあたるこうした行為は他の地域同様，秘密裡におこなわれたのが常である。人に見られると効果はなくなるのみか，逆にイノッた側に祟りを成すといわれ，カミオロシによってしかイノリが行われたことはわからない。アリガタヤ，アリマサン，ドンドコヤなどと呼ばれ，佐渡島村落社会でひろく信仰を集める宗教者（佐野 1986: 858）のひとりによれば，ものごとがうまくいかなかったり，病気が治らないのはサワリ(障り)があるからであり，そのサワリの原因にはカミサン（神様），地神，ホテシサン（仏様），死霊，生霊，ムジナ・犬・牛・馬などの動物，といった種類があるという（佐野 1986: 858）。邪悪なイノリもこのようなサワリを引き起こす技術である。もっともおそろしいのはムジナの力を用いて女性が同性をイノッた場合であり，これは最もオソゲエ（恐ろしい）サワリを引き起こすという。

本稿の課題は，ムジナ[2]を使役する邪悪なイノリの語りにあらわれる佐渡島村落社会のコズモロジーの一部を素描することである。イノリの行為自体は秘密裡に行われるが，住民はイノリについて「これは噂なんだけれども」という保留つきで雄弁に語る。そのような語りにあらわれるイノリの検討は，佐渡島のムジナ信仰の一側面を描き出すとともに，彼等がなにを目的にイノルのか，あるいはイノルと考えられているのか，という点で，彼等の祈りや願いをも検討することとなり，イノッた者，イノリについて語る者のコズモロジーをも描き出すことになるだろう。

Ⅱ．調査地の概要

本論は新潟県佐渡島の村落における調査に基づくものである。まず，調査地について簡単に述べる。白田地区（仮称）は，1993年8月現在人口72人，世帯数23世帯のA，人口80人，世帯数26世帯のB，人口50人，20世帯のCという三つの村落の連合であり，隣接する黒森地区（仮称）は世帯数約40世帯，人口約130人（中西 1993a: 1041）である。現在は行政区分上分断された形になっているが，C村の本間三十朗を「タチハジマリ」（この地域にすみついた最初のイエ）として特別視することでいわゆる「我ら意識」を共有しており，本来同一の共同体であるとの認識が強い。白田地区のA以外はいずれも海に面し，背後に山並が迫っている。海に沿って曲がりくねった高低のはげしい道路に結ばれたこれらの村々は，大正7年から15年にかけて県道が整備されるまでは「歩行が困難」な山道で結ばれていた。この交通の不便さが，佐渡でも古風を残す，と言われた地域を形成した一因である。婚姻によって生じるいわゆる姻族はエンルイと呼ばれた。「生きてエンルイ，死んでシンルイ」（岩本 1986: 221，1991: 42）などといわれ，エンルイを生じさせた当人すなわち婚入者が死ぬと，それまでエンルイと呼ばれていた残された姻族はシンルイと呼ばれるようになる。3代前迄系譜をたどってゆくと村の9割の家がシンルイ（祖先を通じて姻族関係をもつ家）（岩本 1986: 220—224）になってしまうことも珍しくない。これは一般的に島内で村落内婚が奨励されていたためである。シンルイもオモシンルイとウスイシンルイとに区別される。オモシンルイは，死者が出た折りにイロ帳と呼ばれる帳簿に記名をし，男性は三角の紙を額につけ，女性はイロ帽子を被るといった特定の服装をして野辺送りをすべき（大給・田代 1957: 99—106）関係者(イロキという)が三人以上のイエである(岩本 1986: 261—6)。シンルイを生じさせた祖先の死後50回忌(または33回忌)に二股のトウバをたて，エンキリを行う（岩本 1986: 222)。他村に嫁ぐ場合には，他村にエンルイができることになる。白田地区，黒森地区とも相互にエンルイ，シンルイ関係で結ばれており，エンルイ，シンルイのイエで重要な儀礼が行われるときは，山越えをして参加するなど，交通の困難にも拘らず村落間の往来は不可欠であった。イエは土地とカマドをもってその象徴とし，生計を共有する生活に不可欠なものと認識された。その存続がなにより重要視された[3]ので，ニレ（二代の意，跡継ぎ）のないときはシンルイなどから養子をもらう。オトウトナオシとよばれる，既婚男性が死亡した場合にその弟が嫂と結婚するレヴィレート婚や，その反対にイモウトナオシといい，既婚女性が死亡した場合にその妹が姉の婿と結婚するソロレート婚がごく普通に行われていた。イエの存続を重視するとともに婚姻によって発生したイエ同士の関係を大切にする思想の現れであろう。イエのシステムのほかにマッケー（地域によってはマツイ，バッケ）という血縁集団があり，これは子供が生まれることによって生じる関係の保証システムである。

生業は稲作を中心として，かつては木挽，炭焼で栄えたというが，相川金山からの炭の需要が失われるとともに，相川町との経済的結び付きが急激に失われていったという。現在では，稲作，牛牧畜のほか，漁業，海藻の採集を生業とし，夏の観光シーズンには民宿として賑わいをみせる家もある。過疎化と高齢化は極めて深刻で，老婆や老人の一人暮らし，足の悪い老夫婦のみの世帯もみられる。

この地域ばかりではなく，島内の村落を特徴付けるのは，その住民の神仏[4]に対する信仰の厚さである。人々は「マシテハナラン」といういいまわしをしばしば口にするが，それは神仏はどんなに疑わしいと思っても信心すべきである，という意味の戒めであり，「マセショウ」というのは戒めを守らない不徳な人物という評価を表す言葉である。そういったなかで人々に「アリガタヤ」「アリガテエモン」「アリマサン」「ドンドコヤ」などと呼ばれて親しまれている宗教者が島内に何人かいる。彼ら（彼女ら）はミクジ（卜占），病気なおし（あるアリガタヤは「揉む」という），漁つけ（大漁祈願），牛捜し，失せ物判じ，縁談，厄除けなどあらゆる願いに応える宗教活動をおこなってひとびとの信仰を集めているのである。あるアリガタヤの口癖は，「目には見えでも，手には取れでも，カミサンはまちがいなくおるんらしのう，一心にイノッて一緒に救って貰いませんか」というものである。各村には少なくとも一つの神社があり，サイノカミ（道祖神），ジュウジンサン（山の神），などをまつる無数の祠や石塔が立つ。「どの家でも必ずひとつはカミサンを持っている」といわれ，それらの手入れは老人たちによって日々行われているものの，その由来は多くの場合不明である。C村の長老，北村ツヤ（仮名）は90歳になっても毎朝6時には地蔵堂におもむいてイノルことを欠かさない。この際イノルのは家内安全，大漁，豊作，牛の健康などである，という。特定の神が特定の目的について効力を発するといった信心もあり，眼病にきく，という神には「め」と自分の年齢の数だけ半紙に書いて祠に奉納するというイノリもある。

これらのイノリの中で，オソゲエ（恐ろしい）という感想のもとに語られるイノリの対象となるのが，ジュウジンサン，トンチボ，ムジナ，カノモン（彼ノモン），ヨツアシノモン，ヤマノカミなどと幾つもの名を持つ神なのである。これは山の神，塞の神，薬師如来，牛馬神，龍神などと同一視（本間 1986: 199—231）され，あらゆる祈願の対象となる一方で，「ヨゲナモン（悪いもの）らったのう，むかしはオソゲエ神さんらった，いまでもオソゲエ」「いまでもタタリ（祟り）をなすっていわれとる」というのがその神に対する大方の見

* 慶應義塾大学大学院

方である。人々のこの神に対する態度は両義的であり，その力を崇拝するとともに害を為す存在としておそれをいだいている。ムジナ，ヨツなどと呼ばれるようにこの神は「狸に似た」ヨツアシの動物とも同一視される。もっとも，神と見做されてイノリの対象となる動物はムジナだけではなく，水神，龍神と考えられ，リュウグンサン，ウガンジンサンとよばれる蛇，漁の邪魔をするとされるイルカ・鮫・トド・鯨，漁の協力をする亀など多数あるが，邪悪な目的を持つイノリに最も深く関わるのはムジナなのである。ムジナを祀る寺社は島の親分であるという相川の二つ岩大権現をはじめ有名なものだけで百以上存在する（山本1977: 53—60)。二つ岩の団三郎，おもやの源助，湖鏡庵の才喜坊など，それぞれ固有名詞を持ち，人々に親しまれている。ムジナ同士は兄弟姉妹関係（sibling）にあたるキョーダイ，エンルイなどの関係を持っていると考えられ，例えば相川町関の「寒戸さん」は，両津市北鵜島の「井之花さん」とキョーダイで，相川町の「二つ岩さん」から嫁を貰った，などという伝承は枚挙に暇がない。

その中で白田地区C村の花村神社，黒森地区（中西 1990，1992，1993a，b，c）の石倉神社は，あらゆる願いをきいてくれるムジナの神として広く信仰を集めている。白田では旧8月15日，黒森では旧8月23日が神社の祭礼の日であり，その日は近隣の村落から信者が集まり，「お籠り」を行っている。これは，夜7時と翌朝6時に太鼓を叩くアリガタヤとともに拍子木をうち鳴らしてイノルものである。神社の管理をするカギトリと呼ばれるイエの者が赤飯を炊き，煮しめをつくって神と信者に供する。熱心な信者は家人に自動車で送迎を頼んだり，あるいはバスを利用してかなり離れた村からもやってくる。神社近隣の人々は夜帰宅して朝再び祈禱に参加するが，遠方の村から参加する信者は神社に文字通り籠ることになる。神社には，お籠りのための布団，茶器などが整っている。アリガタヤは祭壇に向かって，太鼓を叩き，経文を唱えおわると，足の悪いもの，腰の悪いものにたいして加持を加えたり，日々のイノリの作法について教えを説いたりする。

Ⅲ．アリガタヤとイノリ

アリガタヤとして活動する人々が現在に至るまでの経緯は様々である。目が悪くなった，心臓を患ったなど，病の治癒を願うイノリを本人や父母が行ったのをきっかけにアリガタヤになった人や，「お籠り」の最中に神の姿を見たという人がいる。いずれにしろ，アリガタヤとして活動するためにはイノリ，トイギキ，ハンジ，ミクジなどといった儀礼の作法を身につけねばならないので，多くはすでに活動していたアリガタヤについて修行する。次第に信者に漁付け（大漁祈願）や病気なおし，ミクジを頼まれるようになり，アリガタヤとしての活動を行うようになるのである。

白田，黒森地区やその近隣村落では病など人々に災いが起こったときにアリガタヤは重要な役割を果たしている。病が長引いたり，不幸が続いたりすると，人々はアリガタヤに相談する。相談を受けたアリガタヤは太鼓を叩き，祈禱してその原因を探り，その対策を指示するのである。あるアリガタヤによると病はその原因によっては病院では治らないことがある。ハンジの結果，病院で治る病であった場合にはよい病院の方角を占ったりして医者にかかることをすすめる。一方，病院では治らない病や不幸などは，何等かのサワリが原因なので，それを儀礼によって取り除かねば事態は改善されない。交通事故，受験の失敗などもこのようなサワリで起こるといわれる。サワリはムジナ，カミサン，ホテシサンなどが憑依していたり，祟っているために起こるのであり，いずれも適切な処置をしないとサワリは取り除けない。

人々によれば，このようなサワリは，イノリによって意図的に引き起こすこともできるという。もっともそのようなイノリは人に見られると効果がないし，目撃されると逆にイノッたほうが祟られるので秘密裡に行われるため，病や不幸が起こってからカミオロシ，トイギキ，ハンジなどとよばれるアリガタヤの儀礼によって遡及的にわかるだけであるという。アリガタヤはクライアントの心情を鑑み，その後の人間関係の葛藤を避けるためもあって，誰かのイノリであることがわかっても，それを明らかにすることはない。こうした形で人々が本当にイノリを行ったか，という点についての不可知性は保存されているのである。本当のところが誰にもわからないからこそ，それについて「噂」として語ることが誰にでも許される。このような邪悪なイノリについて人々は，「そんなことはするものではない」「今はそんなことをするものもない」というが，その手法については非常に詳しく，様々な種類のイノリが語られる。わら人形を作って丑の刻参りをする（佐野 1986: 858)，墓の頭石を持ってくる（佐野 1986: 858）といったものの他，白田地区，黒森地区では，田畑の水口に御幣のついた榊の木を刺し，回りに尾花をたてた蜂の巣を二つ立てる，という方法でイノラれたことがあるという人がいる。蜂の巣は，イエを空にするという意味があり，それから10日のうちにそのイノリの効果で身内が2人死んだという。また，炒った胡麻で結んだお結び（ビニールの人形を焼いたものや，小豆，卵に目鼻を書き入れたものなど腐るもの）をイノリたい相手の土地に埋めるという方法もあるという。他にも神社の入り口に釘をイノリたい相手の歳の数だけ釘を打ち込み，入り口の階段の段それぞれに，団子を4個づづおいたうえで，相手の枕元に握り飯と卵を置き，枕元と壁を隔てた家の外に線香と蠟燭を立てるといった手法が語られる。卵を土に埋めると当然孵らない，なにも「うまれない」のでその土地で作物は育たず，その持ち主にもニレができない。腐るものを土地に埋めることは，イエの象徴である土地，ひいてはその持ち主の腐敗を図ることであり，蜂の巣を使うのはイエが蜂の巣のように空になるように願うのだ，といった按配である。これらはフレイザーの述べた呪術のタイポロジーに当てはまるものが多い。すなわち，これは類似の法則（law of similarity）に基づく類感呪術（homeopathic magic）および接触の法則（law of contact）に基づく感染呪術（contagious magic）を包摂した共感の法則（law of sympathy）に基づく共感呪術（sympathetic magic）のモデル（FRAZER 1979〔1911〕: 339）が依然として当てはまるものである。あるいはタンバイアーの分析を援用するならば，これらのイノリはメタファーをもちいてかれら自身の活動を理解するための青写真であり自己実現的予言（TAMBIAH 1985〔1968〕: 51）の遂行であると把握することができるかもしれない。イノッた者は，相手が病にかかれば，自分のイノリのせいであると考えるだろう。かからなければ，それにアリガタヤの妨害などなんらかの原因を付加して納得しようとするだろう。いずれにしろ，解釈の起点，解釈のためのモデルになっているのは自分がイノリという技法に訴えたという経験そのものなのである。もっとも，生活環境の厳しいこの地域では誰もがなんらかの病を抱えているのが常なのであるが。

ところが，彼等の間でもっとも恐ろしいとされ，もっとも邪悪であるとされるムジナを用いたイノリはメタファーを用いず，共感呪術（sympathetic magic）のモデルは当てはまりにくい。それはむしろ，ムジナないしトンチボ（頓智坊）と呼ばれる神との取り引きとして語られるのである。

Ⅳ．ムジナへのイノリ

「噂によれば」，憎い人がいた場合，供物をもってムジナの神の神社，寺，祠に赴き，供物を捧げる代わりに，その特定の人物を病気にしたり，殺害してもらうように頼むのがムジナを用いたイノリ，イマイの手法である。もちろんイノル内容は，経済的破綻や，病，不妊，政治的失敗などなんでもよいのであり，ここにも願いの種類を問わないムジナの神の性質が現れている。祠のまえで供物を捧げ，「あいつが憎い」といえばよい，ともいう。

ムジナはさまざまな願いを受け入れる神でありながら，人々を「化かし」，人々に「憑く」存在であるという（中西 1990，1992，1993a，b，c)。化かすというのは「騙かす」，「あやかす」という言葉と同様，認識の錯誤として語られる。ある筈のない火，提灯を見たり，声を聞いたりした，人間に化けたトンチボ（ムジナの異名）に出会った，という経験が「トンチボ（頓智坊）に化かされた」

例として語られる（梅屋 1994）。山道や村境のムジナのすみか，穴などがあるとされているところを一人で歩いているとムジナに憑依されるといわれ，憑かれると「バカになり」，夜に外出したがり，食べ物を際限なく食べるようになる。「ケモノになってしまった」ので，箸，風呂が使えなくなり，ムジナの嫌いな煙草を避けるようになる。女性であっても立ち小便をするなど，いわば文化的規範に反する奇妙な行動を取るようになってしまう。化かされた程度では人々はなにも対策を講じないが，憑かれた場合は行動面での異常性が極めて顕著であるために，こうなると人はアリガタヤに頼るしかない。精神科医にかかって診断が下されても信者はムジナの仕業と信じて疑わない。アリガタヤはムジナの要求を聞き，好物とされる揚げ物，赤飯，酒などの供物を捧げ，憑きものおとしを行う。このようなひとに憑くムジナと，神社などでまつるムジナをそれぞれアカムジナ，シロムジナとして区別している人もいる。前者は野良であり，悪いことも行うが，後者は素性のよい，修行して神になったムジナであるという。

ムジナを用いてイノラれた場合には化かされる場合，憑かれる場合のような異常性は極めて稀薄で，ムジナのせいである，とされる現象は必ずしも特別なものではない。たとえば，身体の一部が酷く痛んだりする身体的な苦痛，胃潰瘍など内臓疾患もイノリの効果，帰結として含まれるのである。アリガタヤは，このようなサワリを取り除くためにはどこのムジナが原因であるのかをまず探らねばならない。太鼓を叩き，神オロシをして，ヴィジョンで知ったり，アリガタヤがいわゆるＡＳＣ（変性意識状態）に陥り，アリガタヤの口を借りてムジナが語ることにより知ったりすることもあるという。この地区のあるアリガタヤは酒のちからを借りてＡＳＣに入る。彼女が酒を飲むと，人が秘密にしていることや運命などすべて喋ってしまうと信じられている。儀礼でムジナのサワリがわかると，アリガタヤは要求された供物を用意するようにいい，供える場所を指定する。それは，イノッた相手が用意したものと同じものでなければならない。

さて，イノリ，イマイの場合問題となるのは，なぜ数ある神の中でムジナに邪まな願をかけるのか，という点である。あるインフォーマントは「ムジナはカミサンだがバカだから供えもん欲しさにヨゲ（悪事）も行う」と語った。ケダモンだからだという。善悪の判断が「バカ」なので自分でできず，人に操作されてしまうというのである。ムジナの力を用いて邪まなイノリを行ったと噂される老婆，橋本キヨは次のように語っている。

橋本キヨ：おれがこのバアサン憎いと，どっかの山の神さん*にあのバアサン痛うしてやってくれー病気をこしょうてやってくれーとかっちゅうて，願うと，そのきくんだ，根が馬鹿だから［…］ものほしいから，きくの

田端ミキ：そうすると，なんだ，イノラれるとそこのイノラれた婆さんがいろいろ病人みてえんなって，えれえめにであうんだ，そうするとこんどはまた信仰する人におねげえしてといてもらうんら［…］

橋本キヨ：そうしるとこういうもんあげてくれー，その，こういう祟りだから，て，あげるとそのもともとのとおりになるわけなんら，だからその山の神さんちゃ馬鹿らー

田端ミキ：オソゲエもんにしとるんらよ

橋本キヨ：ああん，そういうんら

田端ミキ：おっかねえもんにしとるんらよ，憑きゃあ憑いたっちゅうし，頼みゃあおめえならおめえこのひとならこのひと悩まして病人にしるんらよ［…］ヨゲな神さんら

［ムジナを用いたイノリの力についての説明：1993年９月18日黒森地区にて採録した録音記録］

＊ムジナに対する敬称。これに対してトンチボと呼ぶとムジナは腹を立ててタタリを成すという。

Ｖ．イノリの事例から

白田地区，黒森地区には，こういったムジナの力を利用したイノリの事例[5]は二例しか確認されていない。これらは語り手により細部に微妙な差異があるものの，複数のインフォーマントからほぼおなじ筋で語られた。以下，細部のヴァリエーションは［　］内に併記するとともに，資料の採集年月日などを事例末に明記する。

［事例１］

五郎左ヱ門（屋号）の土屋金吾（仮名）は，自分の義理の母親ミツにイノラれて死んだ。ミツはアトイレ（後妻）で，金吾は先妻の子であった。ミツにはＡ村で大工をしていたまえの夫との間に男の子市太郎がおり，その子をナオラセヨウ（跡を継がせよう）として，ムジナであるヤマノカミの祠に赤飯，酒など大量の供物を捧げた。その姿を見たものがいるという。暫くすると，金吾は隣村に集金にいったかえり［酒を飲みにいった帰りともいう：資料ａ］に川にはまって死んでいるのを発見された。山越えをして登校途中のＣ村の小学生が発見したという。川に落ちそうになったのをムジナに蹴落とされたのだろう。［別のヴァージョンでは川を風呂にみせかけ，水死させたことになっている：資料ａ。服を脱いで死んでいたともいわれる：資料ａ。また別のヴァージョンでは畳の上に寝かされているような姿勢で死んでいたという：資料ｂ。］ミツもおらんようになり（死んでしまい），いま土屋家は市太郎にカカッテイル（市太郎が継いでいる）が，金吾がおらんようになった時点で五郎左ヱ門のアトケ（マッケーが絶えたときこう呼ばれる）は絶えたのである。［資料ａ：1990年３月６日採録，Ｃ村，水川サト（73歳），資料ｂ：同年３月３日採録，Ｂ村，土屋一郎（72歳），資料ｃ：1992年３月３日採録，Ｃ村，本間与十朗（79）。この事例はもっとも量的に纏まった資料ｃをもとにまとめた。］

アトイレであるミツは自分のマッケー（血縁関係をもつ者）を土屋家にナオラセヨウとし，ムジナにイノッたというのである。黒森地区にも見られる同様の例は次のようなものである。

［事例２］

酒屋（屋号）の橋本キヨはアトイレ（後妻）ではいった。彼女はわがとこ（自分のイエ）がカギトリをしている石倉さんにイノッて，現在の当主である先妻の息子二郎や孫に祟りをなしている。アリガタヤが拝んだので，息子の二郎は助かったが，まだ嫁は病気で寝ている。現在の当主の父インキョの橋本博之とのあいだに娘ができたが，山田信也という山田家の息子と結婚し，秋田県に引っ越していってしまった。山田家は娘の明子が婿をとったが，明子が死ねば，山田信也と娘は帰ってくると考え，そうすれば娘によって山田家に自分のマッケーが残るという目論見から，山田家の当主，山田太郎をイノッたこともある。［アリガタヤ田口直子によれば，最初は生霊として憑りつき，つぎにムジナにイノッたという：資料ｄ］ところが，大切にしていた橋本博之との間にようやくできた男の子は，勉強中に机に突っ伏して死んでしまった。あれは，山田明子のイトコがイノリに使った団子などを発見してアリガタヤに報告したので，逆に祟られたのだ。［資料ｄ：1988年中西裕二氏が採録，黒森地区のアリガタヤ田口直子（76歳），資料ｅ：1993年９月18日採録，黒森地区，富田啓子（72歳）］

キヨは橋本家か山田家どちらかにマッケーを残そうとしたのだ，というのが人々の解釈である。

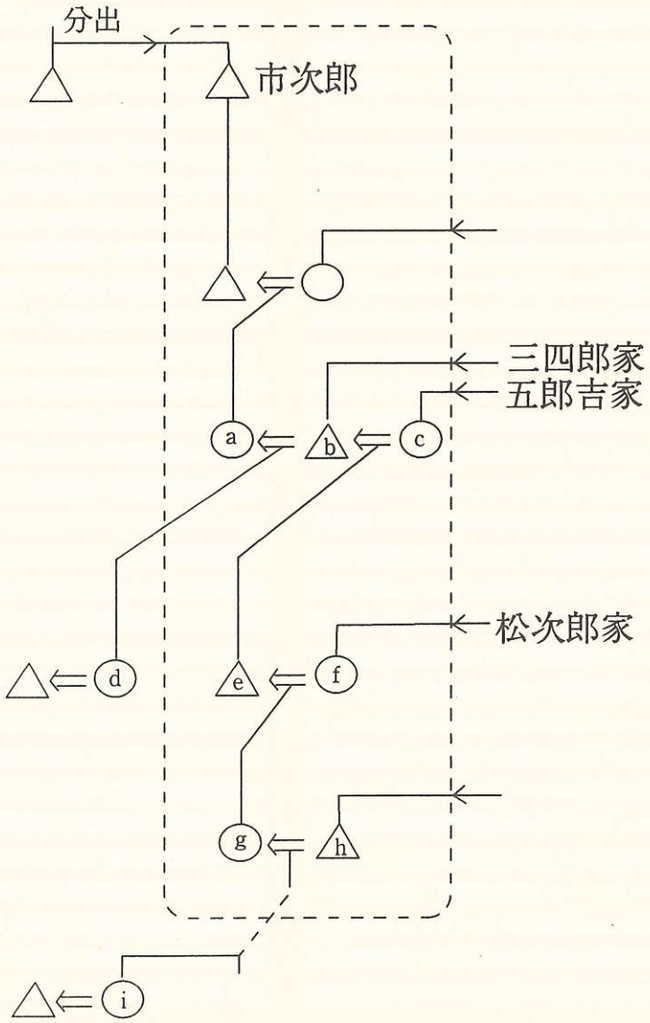
以上の事例をみて，まず第一に指摘できることは，この地域でイノリを行ったと語られるのは，ヨメ，とくにアトイレと呼ばれる後妻として婚入した女性である，という点である。続いて第二に，動機としてかたられるのが自分のマッケーにナオラセヨウ（跡を継がせよう）とした，という点で共通している。第三に，ムジナの呪力はイエの内部にいる自分の義理の息子にも作用するし，そのことを彼等は当然のこととして受け止めている，ということである。このことはムジナの力がイエに帰属するものではないことを示唆している。この点は前の二点と若干の齟齬をきたしている。ムジナに邪悪なイノリをおこなうことはアトイレの特権であると考えられていないのにも拘らず，誰もが用いることができるはずのイノリの例が，このようにアトイレがマッケーの存続を図るという全く同じ筋を辿って「語られる」のはなぜなのだ

ろうか。

Ⅵ．社会構造とイノリ

ここでこのような噂が生じた時期，すなわちこの地域の伝統的社会構造が保持されていた1960年代頃までの白田地区におけるマッケー，ナオルという概念についてみてみると，意外なことがわかる。すでに見たとおり，この地区のみならず，この付近の村落では，マッケーという子の出産によって生ずる「血縁」関係があり，生活保証システムである「イエ」とは明確に区別されている。近隣の民俗誌『佐渡相川の歴史』より例を取ろう（図１）。図で高千の市次郎（屋号）のａはオンナニレ（女性の跡取り）で，ｂを婿にとったが，ｄという女の子一人残して早くに亡くなった。ｂは後妻ｃを取り，男の子ｅを生んだ。ｄとｅはタネキョーダイ（異母兄弟）である（異父兄弟はハラキョーダイという）。ｄは嫁にいき，ナオッたのはｅである。市次郎家は存続しているが，ｄが他家に嫁し，市次郎家を離れた時点で，「市次郎マッケーは絶えた」（岩本 1986：214―16）。岩本（1991：63―64）が村武（1973，1975）のヤシキイデオロギーという用語を敷衍して述べるように，佐渡島村落におけるイエは，カマドをその象徴とし，土地と家屋を伝達するシステムであり（岩本 1986：184―５），経済を含めた生活の拠点である。いわばそれに属する人々の生存を保証するシステムである。マッケーはこれに対し，血縁にもとづいて個人の関係を保証するシステムなのである。

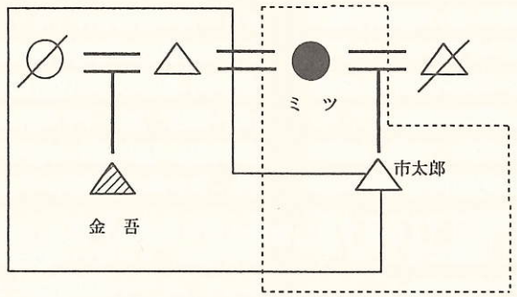
図１　市次郎家の系譜（点線内が市次郎家に属する個人）出所：岩本（1986：215）



つづいてイエの中におけるヨメの地位およびヨメと姑の関係について触れる。古くから伝わる歌に「いとし我子も嫁とりゃ憎い　嫁は前世の仇敵やら」「嫁と名がつきゃ姑がいじる　カカになりたいビンカカに」（岩本 1986：172）と詠まれるように，姑はヨメがカカ（主婦）になるまでは主婦権を強硬に行使した。この地域において伝統的なイエとは，土地，家計，儀礼にまつわる権限などすべてオヤジ（家長）とカカに独占されるシステムである。ニレがオヤジになるにはカマドワタシ，ヨメがカカになるにはシャクシワタシという儀礼が必要とされた。カマドワタシとは大歳の晩に「今でいえば三万円くらいに相当する」（岩本 1986：176）五円程度の現金と通帳，実印をのし紙につつみ，すり切れ一杯に米をいれた一升桝にのせて囲炉裏の前で引き渡す儀礼であり，シャクシワタシとは，大歳の晩に米櫃と杓子を洗い，飯を焚いてヨメに初めて飯を盛らせる儀礼である（岩本 1986：179，1991：33，1992：161―２）。それまでヨメは飯を盛ることや食事の支度をするといったいわゆる主婦の仕事をすることは許されない。カマドがイエ，ひいては家長の象徴であるのと同様，シャクシは主婦権の象徴だったのである。ヨメは結婚後も子を生み，年をとってカカとなり，シャクシワタシを終えて主婦権を得るまでは，家のなかで不安定な立場に置かれた。「ヨメは20年松の下くぐる」といわれ，ヨメは20年間姑に頭をさげつづけ，カカになるまでは約20年かかったという伝承（岩本 1986：172，1991：33）がある。労働力として重要視されたヨメには普段自分の着物をつくろったりするひまもないので，時々センダク[6]と称して実家にかえり，自分の身の回りのものを繕うとともに夫の着物を作ったりした。ヨメはカカになるまでは実家に箪笥，着物などを残しておく習慣であり，婿家の真の構成員とはいえず（岩本 1986：174，1992：166―７），なにものにも頼れない不安定な状態が続いたのである（岩本 1992：163―６）。エンルイとシンルイの区別についても，「生きてエンルイ，死んでシンルイ」という言い回しの含意は，ヨメはいつ離縁されて戻ってくるか分からず，そうすれば婚姻によって生じた関係も切れてしまうから（岩本 1986：221），というイエ同士の関係が不安定であることをも示唆しているのである。カカになって離縁されることは滅多にないが，カカになるには非常な困難がともなった。佐渡の古い民謡に，「添って７年子のある仲だ　嫁に杓子を渡しゃんせ」というものがあるが，それに対して，「年が寄っても耄碌しても　嫁にゃ杓子は渡されぬ」という反歌もあり，ヨメとシュウトの葛藤，対立は根強いものだった。さらには実際のシャクシワタシは地域によっては死譲り（岩本 1986：178―80）であり，成員権の獲得は大変な困難を伴ったことが想像される。

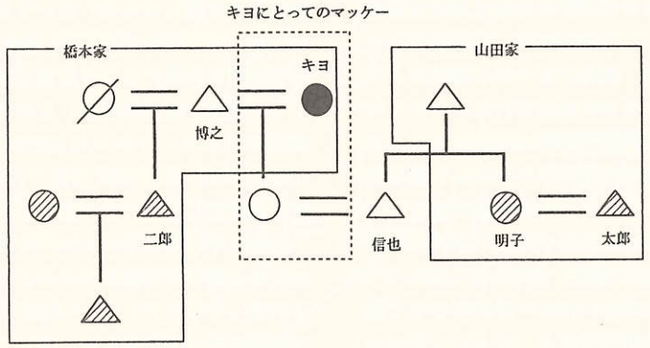
生活に不可欠なイエシステムのなかで，事例における土屋ミツや橋本キヨのように，先妻の男の子が残っているアトイレの場合にはヨメの立場の不安定はその極に達する。図（２，３）にみるようにイエの中に関係を保証する自分のマッケーがいなくなるので，十分な権利は主張できない。ニレにヨメがきたらますますその立場は危うくなってゆく。ヨメは彼女にとっては「仇敵」なのである。一つの家には一組の夫婦が理想とされているので（岩本 1986：195），事例１において唯一イエの内部にいるようにみえるマッケー，市太郎も実はイエのシステムの内部にいるとはいえない。橋本家にナオラない場合は別の家に養子に行くか，インキョ（分家を佐渡ことばでこう呼ぶ）するしかないのである。そうしなければ市太郎もオッサン（結婚できない男の意，結婚できない女はアバという，地域によって呼び名は若干異なる）と呼

図2　［土屋家とミツのマッケー］
ミツにとってのマッケー



家の範囲は実線、マッケーの範囲は点線
●はイノリを行なったと語られた側
△、⊘ など斜線はイノリによって災いをこうむったと語られた者

図3　［橋本家，山田家とキヨのマッケー］



ばれ，厄介者として家のなかで低い地位に甘んじなければならない。オッサンやアバは死んでも「無縁」扱いであり（岩本 1992: 160），イエの機能が祖先祭祀を含むという観点（岩本 1986: 185）からもイエのシステムの構成員とはいえない（岩本 1986: 194—6）のである。

すなわち，事例1のミツ，事例2のキヨらアトイレにとっては，自分のマッケーがナオルかどうか，ということは，まさしくイエという自分の生存や生活を保証するものの確保にかかわっており，他のものから見ても邪まではあるが無理もない願いであり，祈りの対象なのである。よく言われるとおり，呪詛を行ったかどうかは，それが秘密裡に行われる以上知る術はない。しかし，「語り」は語り手の状況を見る目，現状についての解釈のあらわれでもある。それは表情の中で醸し出され，日常の中で沈殿してゆく他者との関係の表象なのだ（渡辺 1993: 60）。とくにイノリのようにその事実関係を確認できない場合には，ある人が患った病いや，被った不幸の「原因」に関する語り手自身の解釈を著しく反映することになる。人々がそれについて語るのは，その死にかたが特殊であるとか，病いの長引く度合いの異常さのみによるのではない。人々の語りの中には，アトイレでマッケーが残らないという，イノリを行うのも無理のない，あるいはそうするしかないと判断

されるようなイノル側の不利な立場，状況への認識も伴っているのである。社会的弱者，剝奪（deprivation）されたものにとって，利用できる数少ない「力」はムジナをもちいたイノリなのである。メタフォリカルではなく，ある存在との取り引きで表される力であるという点を除けば，社会構造も含めたかれらの活動の理解のための青写真[7]は，ここにも準備されていたのだ。

Ⅶ．おわりに

佐渡島のムジナ信仰の昔話としての記録は多数蓄積がある[8]。また最近ではシャマニズム[9]や憑きもの現象と考える立場[10]から分析が加えられてきた。憑きものとしてムジナ信仰をとらえた場合，いわゆる憑きもの筋[11]が存在せず，社会構造と結び付けて考えることが難しいため，他の地域のように限られた富をめぐる葛藤劇[12]としてとらえられてはこなかった[13]。しかし見てきたように，少なくとも白田地区，黒森地区におけるムジナを用いたイノリ（呪詛）の語りについては，イエシステムとマッケーシステムというふたつのシステムの間のずれに落ち込んだ人々の，自分のマッケーを存続させ，生存の保証を獲得したいという一つの切実な願いと，そのような社会的に不安定な立場にいるものに対する語り手の認識を表象しているように思われる。邪まなイノリを行う人は自らの生存をかけてそれを行うのである。葛藤劇はここにも存在しているが，その範囲が異なっていたのだ。

周知のように憑きもの筋が存在する地域においては，持筋の人々は，オサキ，クダなど憑いている「もの」をもちいて人に害を為すことができるという。これは村落内におけるイエ同士の葛藤劇の現れであると考えられる。佐渡島に持ち筋の概念がないのは，ムジナの神は「バカ」であり，供物さえ与えれば誰のどんな願いでも聞く神なので，それを用いることができる特権は，イエに帰属することがないためである。その場合葛藤劇の単位はイエであるとは限らない。イエの中で激しい葛藤が生じる場合もあるのだ。幸運，健康，大漁など，自分の幸福を願うイノリであろうと，義理の息子を含む他人の不幸を願う邪まな意図を持つイノリだろうと，ムジナには一切関わりがない。供物を与えられるままにさまざまなイノリに応えたり，それを除く要求に無差別に応えるものであり，中性的で操作可能な（manipulative）単なる「力」としてとらえられているムジナの属性は，ムジナ信仰を考える場合の重要なファクターであると思われる。それは，状況を変化させるひとつの技法にかかわっているのである。

［付記：題材の性質上，人物名，地域名など仮名を用いた。その他の資料も一部改変してあるところがある。読者諸氏のご理解を乞う。また，草稿にコメントをくださった吉田禎吾，宮家準，鈴木正崇，浜本満，中西裕二，真島一郎，棚橋訓ら諸先生がたに感謝する。］

註

1)民俗語彙は文中カタカナないし括弧をもちいて表記する。

2)穴に住み，肉食でときには木の芽，芋なども食べる動物。狸に似ているが狸ではない，という。中西（1990，1992，1993a，b，c），梅屋（1994）参照。

3)有賀（1970〔1947，1955〕: 121—139）もこのような存続を重んじる「家」の特性について述べており，村武（1973），清水（1979）のように「イエ」概念を一般的なものとして検討しようとする試みがあるが，本稿でイエというとき，この白田，黒森両地区における民俗語彙として用いる。

4)神の本質については松平（1977〔1945〕: 4—21），宮家（1989: 387—9）参照。

5)事例といっても事実かどうか検証できず，またわれわれの目的からいってもする必要がない。正しくは語りの筋とよぶべきであろうか。

6)佐渡島にひろくみられたセンダクという概念については近隣地域の報告，たとえば村武・大胡（1964: 498—500），坪井（1964: 485—9），大島・最上・和田・萩原・本田・浜口・亀山（1964:

187－8）など参照のこと。
7)TAMBIAH (1985: 51)。
8)浜口（1978），山本（1986），相川町史編纂委員会（1981）など参照。
9)佐野（1986）。
10)中西（1990，1992，1993a，b，c）。
11)石塚（1992〔1962〕）参照。
12)たとえば小松（1984）参照。
13)中西（1990，1992，1993a，b，c）参照。

参照文献

相川町史編纂委員会
1981 『佐渡相川の歴史資料集9』新潟県佐渡郡相川町。
相川町史編纂委員会
1986 『佐渡相川の歴史資料集8』新潟県佐渡郡相川町。
有賀喜左衛門
1970 『有賀喜左衛門著作集Ⅸ』未来社。
FRAZER, J.
1979 〔1911〕"Sympathetic Magic." in Lessa and Vogt(eds.) *Reader in Comparative Religion: An Anthropological Approach* (Fourth Edition). New York: Harper and Row Publishers, pp.337－52.
浜口一夫
1978 『佐渡の民話・第二集』未来社。
本間雅彦
1986 「信仰」両津市郷土博物館（1986），pp.192－263。
石塚尊俊
1992 〔1962〕「憑きもの」小松（1992），pp.5－17。
岩本通弥
1986 「家族と親族」相川町史編纂委員会（1986），pp.171－286。
1991 「佐渡のヂワケノシンルイ：土地を媒介とした＜親族＞の構成」『社会民俗研究』第二号，社会民俗研究会，pp.31－67。
1992 「イエとムラの空間構成：新潟県佐渡郡相川町南片辺の事例」『国立歴史民俗博物館研究報告』第43号，pp.145－93。
小松和彦
1984 『憑霊信仰論：妖怪研究への試み』ありな書房。
小松和彦（編）
1992 『憑霊信仰』雄山閣。
九学会連合佐渡調査委員会（編）
1964 『佐渡：自然・文化・社会』平凡社。
松平斉光
1945 『祭：本質と諸相』日光書院。
宮家準
1989 『宗教民俗学』東京大学出版会。
村武精一
1973 『家族の社会人類学』弘文堂。
1975 『神・共同体・豊饒』未来社。
村武精一・大胡欣一
1964 「小佐渡大川における家族・シンルイ・婚姻」九学会連合佐渡調査委員会（1964），pp.492－509。
中西裕二
1990 「動物憑依の諸相：佐渡島の憑霊信仰に関する中間報告」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第30号，pp.45－52。
1992 「日本の憑きもの現象の二つの型について」『九州人類学会報』20，pp.21－8。
1993a 「新潟県佐渡における憑きもの現象(1)」『福岡大学人文論叢』24 (4)，pp.1035－53。
1993b 「新潟県佐渡における憑きもの現象(2)」『福岡大学人文論叢』25 (1)，pp.21－60。
1993c 「新潟県佐渡における憑きもの現象(3)」『福岡大学人文論叢』25 (3)，pp.795－827。
大島建彦・最上孝敬・和田正州・萩原龍夫・本田安次・浜口一夫・亀山慶一
1964 「民俗の諸相」九学会連合佐渡調査委員会（1964），pp.183－224。
大給近達・田代明徳
1957 「佐渡ヶ島一村落における婚姻と親族組織」『人類学輯報』（新潟大学解剖学研究室紀要）第18号，pp.73－108。
両津市郷土博物館
1986 『海府の研究：北佐渡の漁撈習俗』両津市郷土博物館。
佐野賢治
1986 「巫俗とムジナつき」相川町史編纂委員会（1986），pp.850－80。
清水昭俊
1979 「家」『仲間』弘文堂，pp.13－97。
TAMBIAH, S.
1985 〔1968〕"The Magical Power of Words." in *Culture, Thought, and Social Action: An Anthropological Approach*. Cambridge: Harvard University Press, pp.17－59.
坪井洋文
1964 「南佐渡小木町琴浦の社会と習俗」九学会連合佐渡調査委員会（1964），pp.482－491。
梅屋潔
1994 「『化かされる』という経験（こと）：あるいは人類学的実践についての覚書き」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第38号，pp.81－92。
渡辺公三
1993 「人類学における『原因』『因果性』という語の使用について・断章」『族』第21号，pp.49－61。
山本修巳
1977 「佐渡むじな伝承」『郷土研究佐渡』第4号，佐渡郷土研究会，pp.53－60。

ISSN 0021-5023

MINZOKUGAKU-KENKYU

THE JAPANESE JOURNAL OF ETHNOLOGY

Vol. 59 No. 1 1994

Articles

Transformation of the Village Society:
the modernization of the *Tsura* concept in the Noto
district in Japan ……YASUI Manami 1

Marriage payments as an investment:
A case study of the Nagarattars, a mercantile caste in
South India ……NISHIMURA Yuko 28

Notes on Research

Evil Invocation :
Sorcery on Sado Island in Niigata Prefecture in Japan ……UMEYA Kiyoshi 54

Correspondence

What We Can Learn From Anthropology Today
From the Symposium on the Promotion of Education ……AOYAGI Machiko 66
Development, explanation, and anthropologists:
modes of relevance ……HOSOKAWA Hiroaki 67
The Significance and Potentia of Women's
and Gender Studies ……UDAGAWA Taeko 70
Contemporary World and Ethnic Problems ……AYABE Tsuneo 71
Report of a Session for Master's Theses at the Kinki
District Meeting of the Japanese Society of Ethnology ……KOIZUMI Junji 74
Report on 5th International Conference on Thai Studies ……NISHII Ryoko 75
Announcement: Preparations for the Japanese Review
of Cultural Anthropology ……UCHIBORI Motomitsu 78

Book Reviews

Published Quarterly by The Japanese Society of Ethnology
Higashi-cho 3−1−17, Hoya, Tokyo 202

Editor, YONEYAMA Toshinao
Editorial Board: UCHIBORI Motomitsu, SUDO Kenichi, SUENARI Michio,
KAJIWARA Kageaki, KURODA Etsuko, SEKI Kazutoshi, WAZAKI Haruka
Paul SNOWDEN (English Summaries), SHIBUYA Ken (Secretary)

Membership ¥8,000 or $50

民族學研究

59 - 1　　1994

論　文

変貌する村落社会
—能登地方における「ツラ」概念の近代 ……安井 眞奈美 1

投資としての花嫁持参財
—南インド・ナガラッタール・カーストの婚姻 ……西村 祐子 28

研究ノート

邪まな祈り
—新潟県佐渡島における呪詛 ……梅屋 潔 54

資料と通信

「今，文化人類学は世界に何を発言しうるか」
教育関連委員会とシンポジウム ……青柳 まちこ 66
開発問題と人類学者
—いかなる形で関わりあうか ……細川 弘明 67
女性あるいは性差（ジェンダー）研究の意義と可能性 ……宇田川 妙子 70
現代世界と民族問題
—国民国家とエスニシティ ……綾部 恒雄 71
近畿地区研究懇談会での「修士論文発表会」について ……小泉 潤二 74
第5回国際タイ研究会議報告書 ……西井 京子 75
日本民族学会英文誌刊行準備のお知らせ ……内堀 基光 78

書　評

合田濤著『首狩りと言霊—フィリピン・ボントック族の
社会構造と世界観』 ……杉島 敬志 80
関一敏著『聖母の出現　近代フォーク・カトリシズム考』 ……新免 光比呂 84
綾部恒雄著『現代世界とエスニシティ』 ……内藤 暁子 87

学会通信…… 90　　保谷だより……101
新入会員…… 99　　寄稿規定……102

日本民族学会